

# 中國兵亂記 五

## 從輝元卿御次丸秀吉の御陣へ御働の御評議附安國寺坊の事

織田御次丸・羽柴秀吉卿は、高松城砦四ヶ所の要害手に入り、武威大也。今は高松一城にて支へたり。宇喜多家臣の銘々也。秀吉卿御下知仕給ふは、高松へ籠城の諸士信長卿へ御身方於て申は、本知の外に一倍の地を可被<sub>レ</sub>宛行<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>忠功<sub>レ</sub>國主郡主に可成と城中へ計策不<sub>レ</sub>怠、籠城の物頭は清水・中島一族譜代の士なれば不<sub>レ</sub>應、某高松城を魚鱗形に遠巻き、逆心<sub>上</sub>上原右衛門大夫・生石中務爲<sub>レ</sub>案内者晝夜仕寄を附け給ふ。清水宗治・中島元行以<sub>レ</sub>密使<sub>本マヤ</sub>隆景卿・元清陣所へ申上ぐるは、此度籠城の一族非<sub>レ</sub>利連ば枕を並べんと、於<sub>レ</sub>當國吉備津宮神前神水を給る上は、武名を穢し申儀は不<sub>レ</sub>仕候。天下別日の御合戦、御家の安否と存候。御謀も被<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>籠城堅固に可<sub>レ</sub>持抱<sub>レ</sub>候。御武略も被<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>御座<sub>レ</sub>御出陣於<sub>レ</sub>御延引<sub>レ</sub>は、城中より突て出で御次丸・秀吉旗本へ突懸り、御大將於<sub>レ</sub>眼前<sub>レ</sub>長左衛門・大炊助・月清・右衛門尉枕を並べ討死を任り、命は奉<sub>レ</sub>大守<sub>レ</sub>名聞は爲<sub>レ</sub>子孫<sub>レ</sub>面を可<sub>レ</sub>清と申上候へば、隆景卿・元清兩人心實忠義令<sub>レ</sub>感入<sub>レ</sub>候。太守爲<sub>レ</sub>後詰<sub>レ</sub>御出陣被<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>御衛有<sub>レ</sub>之間、籠城堅固に可<sub>レ</sub>持抱<sub>レ</sub>旨被<sub>レ</sub>仰下<sub>レ</sub>候。四月二十日輝元卿猿掛山城へ御出馬、先陣は都宇郡釋迦が峰、不動嶽、鹿山、黒住天神山、岩崎へ出張、近郷野山平等に陣取給ふ。御方の旗數百、峰の嵐に吹靡かすは龍田の紅葉に不<sub>レ</sub>異。高松籠城の老若男女悦ぶ事限なし。日々<sub>レ</sub>軍評定にて御働も御延引の節、宍戸備前守御諫申上るは、信長の御人數被<sub>レ</sub>指越<sub>レ</sub>に付降參の侍大將有<sub>レ</sub>之候、以<sub>レ</sub>御旗本<sub>二</sub>御合戦被<sub>レ</sub>遊候様にと申上候。被<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>其意<sub>二</sub>御働の損益を評し御備定あり。左一手は毛利治部大夫元清・河野兵部大輔・出羽十郎・秋月三郎・梨羽中務・檜崎十兵衛・三浦兵庫・小泉左衛門・有地民部少輔、爲<sub>レ</sub>案内者<sub>二</sub>日幡九郎左衛門・細川兵部<sub>一</sub>是は板倉村より忍寄り、辰田村羽柴陣へ働き候様にとの定也。一手は小早川藤四郎・吉見大藏・立花左近將監・神村豊後守・三

\*鼓か

好佐渡守・三好備後守・國土に笠岡掃部・小田孫兵衛・赤木藏人・成羽越前は、生石村妙現山より織田御次丸御本陣龍王山へ、敵貝を相圖にして、城兵も辻村持實院谷より羽柴陣へ可相働と諸方の相圖通達する處に、安國寺輝元卿へ囁き申上るは、織田信長卿の御武略は中國西國にて御身方申國主郡司へ、恩賞莫大に可被宛行と計策不怠。當方侍の大將此節は御心を被置、敵方へ御仕懸は御延引被成可宜と申上る。御旗本の御備厚く被仰付、敵方變化を御覺被成、其上にて被遂、御一戰可然と申すに付、二十二日の御合戰御延引の趣城内へ被仰下候。清水長左衛門・中島大炊助此由を承り、物頭を本丸へ呼集め申すは、輝元卿二十ヶ國を相隨へ給ひ天下無双の大家也。義昭公を織田信長攻下給ふ軍勢を押へ候様にと、義昭公の御詔意輝元卿の御下知也。賢將勇將多き中に、天下境目の守護不肖の我等式に被仰付儀、生前の面目死後の名譽也。義を重じ名を惜み死を善道に可守、徒に及對陣は智勇武備の不達嘲を可請。一夜討して敵味方の眠を覺し、敵方の剛臆を見ばやと申しければ、同音に感聲して、當月二十五日の夜にぞ定めける。

## 御次丸秀吉の御陣所へ高松城内より夜討の事

夜討の大將中島大炊助・清水右衛門尉、武功の侍江口左京・明石兵部少輔・赤木丹波・禰屋孫市郎・三村孫太郎・高橋右馬允・野山三郎左衛門・片山助兵衛・白井與三左衛門・荒木三河・陶山藤九郎・河原六郎左衛門・植木惣兵衛・小宮孫次郎何も歩行武者十人一人宛夜討に爲馴者小將に定め、赤き袖無し羽織を著し、忠と言へば中と答へよと合言葉を定め、大炊助一手三百人、内先手三十人鐵炮を持せ百々放に打せ、敵の騒動を討捕様にと示合候。右衛門尉三百人、内先手三十人に鐵炮同斷。粟屋信濃は鐵炮の上手五十人相隨へ、搦手の門外平山口に待居候。大炊助・右衛門尉引取る時、敵慕ひ來らば、くひ可留術也。中島元行雜兵三百五十徒立、清水宗重三百人、今夜子の刻に城門を出で、辰田村と平山の間西善寺・星友寺の藪の木影にて、手配して羽柴陣へ指向ひけれども、堀尾茂助・木村小隼人の、辰田村御崎山峰に段々に備へ居る茂助備へ、鐵炮を打懸ける。敵寢身に是を聞き騒動無限。南無將軍地藏菩薩今日

\*一右京進左京進何れか。

\*二別本此外、吉田市郎右衛門・平安喜兵衛・高杉多喜衛門・難波喜兵衛・安原彦六・中島九兵衛・大村政右衛門・神田與四郎・垣見安右衛門・岩田茂善介・岩田茂右衛門・三宅五郎右衛門・中尾久助を入る。

の夜討に得<sub>レ</sub>利させ給へと心中に祈念任り、淺野彌兵衛・杉原七郎左衛門の陣屋に火を付、鯨波を擧げ鐵炮を打懸れば、敵陣騒動限なし。麿馬つなずに乗り物具よ鍵よと諸陣騒動しける。城兵駈入り駈抜け交り合ひ、彼に顯れ此に隠れ火を散して戦ける。折節闇き夜なれば敵身方分り兼たり。城兵羽織合言葉を印にして働きければ、中島右京進\*一・同彦十郎・阿部左衛門次郎・藥師寺次郎兵衛・秋山久衛門・林與惣・小倉小右衛門・眞壁次郎左衛門・陶山藤兵衛・赤穴雅樂・石井彦左衛門高名を任る。中島左京進は淺野彌兵衛家來と引組で、上に成り下に成り、二三度仕けるが、左京進終に被<sub>レ</sub>組伏て、身方は無きか助けよと呼ばはりけるを、禰屋勝五郎聲を聞知り、禰屋爰に有るぞ、左京は上か下かと問ふ。左京下に有りと云ふ。禰屋則上成る敵を刺殺して左京に首を捕らせける。勝五郎今夜高名の印は無りけれども、首尾勝れて能く働也。河田八兵衛・佐野七左衛門・陶山次郎兵衛・眞壁三郎兵衛・高木新兵・眞野市郎左衛門・片山仁左衛門首を捕り、何れも品々高名仕ける。庄野九郎は首二つ若黨に持せ城中へ返し、我身は残り留り、數度相戦ひ、無比類<sub>二</sub>働にて討死を仕けり。高松落城の後、於<sub>二</sub>猿掛城<sub>一</sub>隆景卿へ大炊助申上候へば、庄野三次郎甥にて代々名譽の働有る者也、五歳の男子に本地の外に一倍の加増を被<sub>レ</sub>下、兼光の太刀を拜領す。禰屋勝五郎も無比類<sub>二</sub>働仕ると、家光の太刀を頂戴す。城兵小宮山次郎・荒木與兵衛・川西五助・木村市太夫・三田六藏・小村半之丞・芳賀市右衛門・小川九兵衛・秋野彦助・平田四郎兵衛・大崎六兵衛\*二度々相戦ひ、敵二騎三騎宛討捕り其後戦死仕る。秀吉の諸將も陣々より出合ひ、大勢に成つて城兵を取巻き、赤の羽織著たる者敵兵成ぞ討捕れと呼はる。大炊助一手所々にて討ちつ討れつ、浮田秀家裏切と聲々に呼る。城中へ引入る時、片山助兵衛狸々緋の羽織を著て、諸勢に遅れ引退くを能敵とや思ひけん、加藤孫六と名乗り追懸け跡より鍵突る。助兵衛申は、身方成ぞ、過すなと云ければ鍵を引取る。助兵衛は無<sub>レ</sub>難城中へ引入るを見て、敵兵成るに残念と笑ふ。城兵引取る時、淺野彌兵衛・堀尾茂助陣屋の旗差物奪取り、上方勢も和井本村迄附來るを、粟屋信濃守待向ひ、敵なれば釣打か百々放に敵の備へ打懸て、數十人打落す。秀吉本陣より使番來り、永追せぞ、深入して敵の虜と成るなど、使番觸廻り、人數を上る。清水宗治池下丸門外に人數を立、引取身方を待居る。大炊助・右衛門尉は、軍勢を悉く城中へ引込み、其後門を戸指、升形にて打捕る首を篝を焼て改め、明る

二十六日には、城中働の場所を繪圖にし、委細書付、御本陣へ注進仕、以少勢大軍に夜討懸、可然敵數多討捕、手前に無越度引入段、都鄙の名譽無比類、由、御感悅不大方候。

### 藝州勢清水中島在城へ狼藉の事

中島大炊助在城守る弟中島九右衛門、高松へ注進するは、藝州勢御旗本の軍兵近郷の地頭高松籠城の留主へ押込み、財寶を掠め取り米穀家財を奪取り、妻子沽却仕り庶民の往來を妨げ、爲薪堂社、佛閣を覆し亂妨し、宗治氏宮惣社大明神、氏寺清水山惣寺院、中島元行在所の社明現宮、氏寺寶福寺、墓所報恩寺にて無狼藉様にと制禁しけれども、軍勢不聞入由、宗治・元行軍勢狼藉の品々隆景卿へ言上仕ければ、御評定の上、當國高松籠城の諸士於中軍勢無狼藉様に、御制札を一村々々に被下候へば、騒動止み諸民安堵の采に安仕任る。此度御利運有て、藝州家替らぬ御代こそ目出度けれ。

### 四月廿七日高松大合戰の事

城中より敵の備々へ遣置く密使御注進申は、當二十七日に當城を一時に可攻落と、敵方評定まち／＼の由注進す。清水宗治・同月清入道・中島元行一行の侍大將を召集め、上方勢寄來る聞え有り、城兵も勝負の損益を評せんと、各思惟を廻し異見を承はらんと申す。月清入道申は、上方の軍將城邊へ寄せ來とも、城内は鎮り閑も不合臆病の爲體に仕有ば、秀吉の軍勢短氣成若者城邊へ寄來らば、彌々僞り引寄せ鐵炮にて可討捕敵の模様により有無の可遂ニ一戰と申候へば、諸將尤と同意仕る時、中島元行申は、各被申所尤也。乍去敵を近付可討捕儀敵方にも有術。近付不寄時は無詮。假令五騎三騎捕共軍に墓不參。及對陣日數重り候へば兵糧も無心元候。從城内突て出で、遂合戰討死仕らば後聞可宜と申せば、衆口一同に感聲す。左有ば勝負の損益を評仕り可相働と、中島大炊助一手江口左京進・明石兵部少輔・赤木丹後守・藥師寺王水・頓宮次郎左衛門・土屋四郎左衛門・土師平十郎・

湯淺九郎兵衛・同新藏・中島與助・鐵炮頭中島孫兵衛・同右京進・同彦十郎・鈴木四郎次郎・坪和源太郎・横田次郎吉・  
 河部左衛門次郎・近藤新九郎・和田三郎兵衛・中島藤藏・小宮山孫次郎・中島平藏・難波次郎・福光又兵衛・同十郎右衛  
 門・田邊孫次郎・雜兵二千五百餘、同二十六日夜子の刻に城門を出で、平山星友寺に勢を伏せ待居ける。是は秀吉の  
 旗本搦手城門へ押寄せ給ふ時、不<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>寄<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>後備<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>突<sub>レ</sub>掛<sub>レ</sub>との術也。清水右衛門尉は高橋右馬允・笠岡掃部・鳥越五  
 兵衛・新山兵庫・野山三郎左衛門・難波傳兵衛・禰屋孫市郎・土師九郎兵衛・三村孫太郎・通生又七郎・土倉三郎兵衛・  
 林與惣・同與九郎・鐵炮頭片山助兵衛・土居神三郎・清水兵部・同與右衛門・吉田肥後・平田次兵衛・同與兵衛・國府市  
 正・同三郎兵衛・福竹次郎助・佐野因幡・荒木三河・内田五兵衛・河原六郎兵衛・池上雅樂・安原彦左衛門・上野豊助・福  
 田三郎次郎・千原市郎兵衛・白井與三左衛門・植木物兵衛・雜兵二千餘相隨へ、今夜子の刻城門を出で、平山谷々に人  
 數を伏居ける。是は秀吉の旗本城門へ寄來る時、横鎧に可<sub>レ</sub>突<sub>レ</sub>懸<sub>レ</sub>との術也。粟屋信濃は相野主水・田代雅樂・兒玉藤  
 七・手島彌兵衛鐵炮の上手二百餘を召連れ、平山の谷川に筒先を并べ待居ける。是は城内より拵置く落し穴へ敵落  
 入らば、可<sub>レ</sub>討<sub>レ</sub>捕<sub>レ</sub>との術也。秀吉卿の旗本へ鐵炮を打懸る。此時敵の騷動を見計ひ、元行宗重敵不意の所へ可<sub>レ</sub>突<sub>レ</sub>懸<sub>レ</sub>  
 との遊軍也。清水月清・末<sub>近坊</sub>及左衛門は大手馬揃口を相守り、蛙が鼻口は清水豊後・中島左京・日幡九郎左衛門相守り、  
 池下口は清水田兵衛・横尾大膳相守り、清水宗治は近習四五十騎にて城中を廻り、手薄き方へ加勢を籠めんと下知  
 をなす。難波田右衛門・松重次郎右衛門・阿曾沼四郎次郎・福光五右衛門・大坪新右衛門・松尾彦兵衛・長瀬七郎五郎・  
 大津依與三右衛門・長山彌兵衛・長延五郎兵衛・龜山三郎兵衛・川西又右衛門・安原太兵衛・乃美孫左衛門・荒木太郎  
 右衛門・徳田右衛門・雜兵三千餘相隨へ八幡山麓の堤へ出張り、赤き橈<sub>しなへ</sub>に金を以て惣社大明神と書きたる大馬印、赤  
 地に巴の紋付たる大旗押立。四月二十七日辰の刻に、信長卿の軍勢三方の山より押下し魚鱗形に遠巻き、羽柴左衛  
 門督・木下備中守・花房助兵衛は辰田村より蛙が鼻へ押寄せ、蜂須賀彦右衛門・山内猪右衛門・戸川平右衛門は馬揃  
 口へ押寄す。織田御次丸は小山村の宮山に本陣を居る給ふ。羽柴秀吉卿は辻村の内のかき上を號<sub>レ</sub>羽柴陣<sub>レ</sub>て、諸陣を  
 見下し下知をなす。鐵炮を百々放<sub>レ</sub>に打懸る、城中よりは鬨も合せず候節、羽柴秀吉の本陣より狸々皮の羽織を著、金

の半月の前立物指たる武者、又黒き羽織に頭成づぶりの冑を著たる武者二騎、淺黄羽織を著せたる者二十人計馬の廻りに召連れ、和井本村砂場へ來り並<sup>び</sup>三輪乘を任りける。清水宗治申すは、能武者ぞ若者共討捕れと申す。林與九郎・荒木新四郎・渡部市助穴道より仕寄せ、筒先を揃へ同時に打懸れば、黒き羽織著たる武者妻手へ討落しける。此時城兵鬨を擧げ鐵炮を打懸けゝる。中島又十郎駈寄り若黨に首を捕せける。城中へ討捕る一番首也清水長左衛門が馬印を目懸け、諸方より押せ使て鐵炮迫合を初めける。城兵は計略あれば態と不<sup>レ</sup>進鐵炮打出す計り也。身方打散り備へ居けるを、宗治自下知して旗本小印の者共を遣し備を厚<sup>シ</sup>、堤に人數立並べ、手々に鎗取て敵近づかば戦ひ突崩さんと鋒矢に備へ待懸けたり。此時粟屋信濃、谷々より大筒小筒を百々放に打懸る。上方勢四度路に成ける時、中島元行、清水宗重横合より鐵炮を打懸け、赤地の吹貫、金を以て明現神體書きたる前立物指し、黒き羽織に大紋付けたるを著、烏黒の馬に梨地の鞍置いて打乗り、從<sup>ニ</sup>將軍義昭公當城へ加勢の大將二階堂近江守嫡孫中島大炊助元行、并、清水右衛門尉宗重と名乗る。上方勢、すはや敵なるぞと我先に鎗取て突懸る。城兵も相懸りに入亂れ相戦ひ、秀吉の軍兵落穴へ數百人落入り騒動し、敵の備四度路に相見ゆる節、清水宗治も秀吉の御陣へ突て懸り入亂れ相戦ふ。中島元行身方を諫め、引な進めよ、勇は先祖の面を發し、義は戦死の骸を清むと、敵の備多少立配り以<sup>ニ</sup>此心<sup>一</sup>今日可<sup>レ</sup>遂<sup>高</sup>名<sup>と</sup>也。是を聞て懸亂さんとすれども不<sup>レ</sup>亂、破りて通る敵をば切て落す。首捕るもあり被<sup>レ</sup>捕もあり。少も不<sup>レ</sup>疾元行隨軍猪の勢子を如<sup>レ</sup>破、眞驀に駈入て須臾に變化して、十文字に當り巴の字に廻りければ、秀吉の從軍已に開き靡かんとす。清水・中島が軍勢盡<sup>ニ</sup>粉骨<sup>一</sup>高名をす。宗治・元行捨<sup>ニ</sup>身命<sup>一</sup>戦ひければ、上方の軍勢所不案内場狭き所に、城内より落穴を掘らせ上を如<sup>レ</sup>道に任り、左右は沼なれば究竟の兵落入數百人被<sup>レ</sup>討ける。殘る軍勢秀吉へ申上るは、軍は今日に限る間數ぞ。衛御替<sup>てだて</sup>へ重ねて可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>遂<sup>御合戦</sup>と申捨て、大窪、辛川、菅野、横井村へ引退きける。津田與左衛門・生駒甚助・池田久左衛門は、御次丸を先立て銀冶山の城へ引入り給ふ。上勢壓を持ち前後に二十騎計隨へたる將、平山を越え長野村へ引越す時、白井與三左衛門・中島又十郎を先立て追懸れば、上方の將も小返して相戦ひ、金の梨打烏帽子を著、旗を持たる將を、中島又十郎突伏せければ、片山助兵衛駈合せ、又十郎に首を取らせける。金の

半月指したる武者と、白井與左衛門暫歇ひけるが、白井が妻手の股を突詰め可被討と見えし時、中島大炊助駈合せ、金の半月指たる武者を討ち、郎等彌兵衛に首を取せける。白井を助くれば上方勢は平山長野村へ退きけるを、數多追討に任り、辰田村山の峰に龜甲の内に二ツ引兩付たる赤旗を押立て、駈散したる味方を集めける。清水長左衛門は平山の峰に巴の旗を押立て、以<sub>レ</sub>使番<sub>二</sub>諸手<sub>一</sub>へ觸ければ、小勢の堅は<sub>かため</sub>大軍の虜と成るぞ引取れと、舉<sub>レ</sub>勝鬨<sub>二</sub>諸勢を城中へ引入れ城門を戸指<sub>續し</sub>、今日卯の刻より午の刻迄の合戦に、敵の首四百二十六城内へ討捕ける。城兵も九十七人被<sub>レ</sub>討ける。三の丸の馬場にて首相改め、同二十八日に、昨二十七日敵大軍を以て押寄せ候。城内よりも出張り相戦ひ、敵討捕ける首共家名品々遂<sub>ニ</sub>注進<sub>一</sub>ければ、大軍取詰め候處に遂<sub>ニ</sub>防戦<sub>一</sub>、物頭數多雜兵四百二十餘被<sub>レ</sub>討捕候段、廣大の働無<sub>ニ</sub>比類<sub>一</sub>思召と、御感悅不<sub>ニ</sub>大方<sub>一</sub>候。

### 宇喜多責口仕寄付事并城主働の事

四月二十七日の大合戦の後、城内矢倉狭間に大筒小筒を配り敵陣へ打出しければ、手負死亡不<sub>ニ</sub>數知<sub>一</sub>。秀吉卿は家臣の輩從軍の銘々召連れ、山の峯へ取登り城内を見下し、五月二日の夜宇喜多が軍勢、和井元<sub>本</sub>口外の惣門一町外に道筋を堀切り、其内に柵を付け土俵を重ね、土手を築き上げ大筒矢鐵炮を賦り、數千の番兵を付置き、城兵の出入を留めたり。城内の貴賤身方への通路を被<sub>レ</sub>留及<sub>ニ</sub>難儀<sub>一</sub>候。打破れと評議仕り、中島又十郎・清水右衛門尉爲<sub>レ</sub>大將、明石兵部少輔・頓宮次郎左衛門・禰屋孫市郎・三村孫太郎・赤木丹後・友野彌右衛門・片山助兵衛・鳥越五兵衛・村與九郎・國府市正相隨へ、中島又十郎は金と銀と一枚糶り小實の鐙、星冑に鉞形打ちたるを著、烏黒の馬に打乗り、清水右衛門尉は唐綾緘の鎧に、白星の冑に鉞形打たるを猪首に著なし、栗毛の馬に打乗り、走地に龜甲の大旗、赤地に巴の大旗二流指揚げ、疊楯廣きを立並べ、二千餘を二手に作り先手にて鐵炮迫合を任る。扱惣勢は柵を踏破らんと働き候へども、敵將より柵の内に數千挺の鐵炮を配り、如<sub>ニ</sub>雨降<sub>一</sub>に打懸れば、先手の者共打すくめられ、人を楯に取不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>進。敵陣は山のかさより見下し、大筒種ヶ島を打懸ければ、城兵の備浮立ち、兩大將の下知をも不<sub>レ</sub>聞入<sub>二</sub>時、

清水右衛門尉、爲義に捨命柵を引破れと下知すれども、出張る身方はなし。中島又十郎は堀切の底へ飛で下り、先陣の者よりも出張り下知をなせば、敵兵數多の鐵炮打懸け危く見ゆる時、片山助兵衛申すは、大將は軍勢合所にて輕き働仕り給はぬ物ぞと申して、是非引退ければ、堀の端に馬印を押立て、今朝卯の刻より午刻迄、虎口を不<sub>レ</sub>去戰ふ。城兵に痛手負ふ者不<sub>レ</sub>數知、敵方は三重に構たる柵の内より鐵炮を打出し、弓を射ければ、身方に手負もなく荒手に入替り戰ふ。城兵の死亡多ければ、中島又十郎に是非引取れと元行より數度の有<sub>レ</sub>軍使ば、敵の柵を不<sub>レ</sub>引破ば虎口を去まじきと申す。清水右衛門尉は頼先を被<sub>レ</sub>射手負ひ、馬より落ちけるを、難波田兵衛引立て是非城中へ引入れける。中島又十郎は、運は天に有り、柵を踏不<sub>レ</sub>破ば、引取間敷と申居けるを、額より妻手の小鬢へ打ちぬかれ、背に當りはけ戻る。中島大炊助は危き働不<sub>レ</sub>仕物ぞ引取れよと、石井新七郎を遣し、諸勢一同に是非城中へ引入る。大炊助は池下口の堤に人數を立て、敵の募來るを待けれども不<sub>レ</sub>付入明る三日に和井元口へ働の<sub>品</sub>の<sub>説</sub>刃々を書き付、敵兵二十五討捕る。城兵は八十二騎被<sub>レ</sub>討ける趣御本陣へ注進申ければ、敵方山に構<sub>レ</sub>要害相戰ひ身方に討死多き由、自今以後輕き働き仕間敷候。日限を御定以<sub>レ</sub>御旗本<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遂<sub>レ</sub>御合戰<sub>レ</sub>由被<sub>レ</sub>仰下<sub>レ</sub>候。

### 高松城内持口を定事

五月五日の夜、池下口外の門より二町外和井元口<sub>本</sub>を掘切り、柵を付け土圍を築き、城内を見下し鐵炮を打懸る。城兵も池下に矢防の土手を拵へ、皮楯を張廻し、穴道を掘寄せ相働きければ、出張敵を討捕り、敵陣に死亡手負不<sub>レ</sub>數知。大手二口は大沼に幅三間の道なれば、城内より働き出る時は大軍難<sub>レ</sub>押出<sub>レ</sub>敵募來る時は難<sub>レ</sub>引入<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>損地。敵方より忍の者杯來る時は敵の便りに可<sub>レ</sub>成と、二箇所の橋を引落し、纜橋を用意仕り城兵相守り、通路の三口被<sub>レ</sub>留可<sub>レ</sub>働出<sub>レ</sub>術は絶えたり。抑高松城と申すは、小山を臺にして二重の大矢倉に構<sub>レ</sub>數塹<sub>レ</sub>三つ星に一の字の御旗を押立て、赤地に巴の旗を立并べ、役所には家々の紋付たる幕を張廻し、御次丸と對陣す。二の丸は四方を掘廻し石垣を取り、數々矢倉を揚げて八幡山池下口へ指向け浮田が勢と相戦ひ、三の丸番丘の出崎には亂杭打ち馬の皮の釣楯仕り、白

※別本「此口より和井本口八幡山迄は地續き」云々。

地に二ツ引兩の御旗押立て、赤地に龜甲の内に二ツ引兩の旗を立并べ、役所々々には家の紋付たる幕を張廻し、中島大炊助元行持口なれば、一類普代の家臣相守る。清水宗治中島元行軍談して、銘々持口を定め相守る。原小才村口は羽柴左衛門督・山内猪右衛門・伊藤掃部・花房助兵衛責口なれば、此門中島與助・難波田兵衛・三村孫太郎相堅め、御崎山口出崎は柘植與八・佐久間忠兵衛・黒田官兵衛責口なれば、此矢倉は中島彦十郎阿部左衛門次郎・高橋右馬允相堅め、石井山口は池田久左衛門・糟谷助右衛門・伊藤七藏・岡平内責口なれば、此口は粟屋信濃・清水與衛右門・土屋四郎左衛門・中島孫兵衛相守る。辰田村出崎は荒木平太夫・木下將監・副田甚兵衛・花房彌左衛門責口なれば、此口は中島左京・手島東之介・土師平十郎・眞壁次郎左衛門控へたり。泥三山出崎は仙石權兵衛・淺野彌兵衛・佐藤主計・宇喜多左京筒先を並べ打掛ければ、此矢倉には中島右京・鳥越五兵衛・植木惣兵衛・國府與三右衛門控へたり。秀吉卿御本陣石井山出崎には、蜂須賀彦右衛門・堀尾茂介・木村隼人・加藤孫六控へければ、此の番丘の矢倉には、中島又十郎・清水右衛門尉・江口左京進・赤木丹後相堅む。八幡山出崎は宇喜多責口なれば、家臣銘々控へたり。比矢倉は中島四郎左衛門・林與惣・國府三郎兵衛相守る。大崎山麓は御次丸御陣前、津田與左衛門・生駒市左衛門・牧村長兵衛・蜂谷五郎助責めければ、此矢倉は清水豊後・禰屋孫市郎・平田與兵衛・湯淺九郎兵衛相守る。門前山口出崎は宇喜田一家責め口なれば、高島市正・延原内藏允・中桐與兵衛・弓削次郎兵衛・國留源・左衛門・杉原七郎左衛門・加藤虎之助相加里、大筒小筒如三雨降一打懸る。此和井元口は八幡山へ地續き大事の持口なれば、清水宗治中島元行相堅む。隨軍は松田左門・荒木三河・國府市正・難波傳兵衛・片山助兵衛・林三郎左衛門・同與九郎晝夜に替り相守る。

### 御次丸秀吉卿高松城水攻術の事

五月七日信長卿の軍勢、蛙が鼻口より門前村迄三十町餘に軍勢を立並べ、備の後に柵を付け其跡に根置九間高四間の堤を築廻しけれども、城内よりは見物して居たり。八幡山御崎山の出崎へ出張敵あれば、鐵炮を打懸け五騎三騎宛討捕る。五月十三日には堤を築立て、土手上に數々の砦を構へ、門前村より大井川を關懸る。備前國長野村より

谷水を堰懸け、備中國鳴谷川へ掘貫き、諸方の洪水を堰留る。五月雨の頃なれば、數日降續き、洪水晝夜に増し、波蕩々として如<sub>レ</sub>蒼海、籠城及<sub>ニ</sub>難儀<sub>ニ</sub>時は、逆意を指挾輩有て、敵を城中へ引入る事有<sub>レ</sub>之ば、宗治元行相談して、替々毎夜矢倉役所へ酒肴を持參し、諸勢を慰め、勤番無<sub>ニ</sub>油斷<sub>ニ</sub>様に催促仕りけり。尤密使の者を敵の陣々へ遣し置き、敵方の術を聞届け城内にも變化す。晝夜水重増ければ、小船二十三艘作り城中の用事を達す。敵方には數十艘の船を堤の内へ入置き、船に井樓を揚げ、船端に疊楯を立并べ、城邊へ漕寄せ城内へ火矢を射懸ければ、城中には家の上へ登橋を掛打消す用心仕りけり。矢倉狭間より弓鐵炮を打懸れば、間近く寄る船はなし。上方勢の鐵炮の音は如<sub>レ</sub>雷神。宗治元行は毎夜密使の者を召連れ城中を廻り、銘々持口にて無<sub>ニ</sub>油斷<sub>ニ</sub>様に催促仕ける處に、二十日の夜、柏木の出崎へ宗治廻ける節、水中に人形に似たる物見えける。依て待居ければ、大男頭に脇指と帷子を結付け石垣へ上る所へ、密使の者遣し生捕り、誰某の御陣より來るぞと尋ぬれば、身方の御大將より御使に、轉小四郎と申者也。御書是に有り<sub>ニ</sub>竹筒を指出す。御書一通有<sub>レ</sub>之本丸へ召連れ歸る。二十一日に籠城の軍勢を呼集め、從<sub>ニ</sub>御大將<sub>ニ</sub>の御書讀上る。上方の大軍備厚く強大なれば、御合戦の初終御評議の内に、新堤出來、數日降續き水重増り、城中難儀無<sub>ニ</sub>覺束<sub>ニ</sub>思召、諸大將忠戰諸軍勢被<sub>レ</sub>盡<sub>ニ</sub>粉骨<sub>ニ</sub>段、不<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>勝計<sub>ニ</sub>、數月相抱被<sub>レ</sub>遂<sub>ニ</sub>忠戰<sub>ニ</sub>無<sub>ニ</sub>比類<sub>ニ</sub>思召候。以<sub>ニ</sub>御旗本<sub>ニ</sub>近日被<sub>レ</sub>遂<sub>ニ</sub>御合戦<sub>ニ</sub>、新堤被<sub>レ</sub>斬落、諸勢可<sub>レ</sub>被<sub>ニ</sub>相救<sub>ニ</sub>の由、宗治元行より諸物頭へ可<sub>ニ</sub>申聞<sub>ニ</sub>由被<sub>レ</sub>仰下<sub>ニ</sub>候。軍勢一同に感悅仕る。今一通は御黒印の密書也。宗治元行へ御内意被<sub>レ</sub>仰下<sub>ニ</sub>は、上方の軍勢強大にして後詰の用心<sub>稠し</sub>ければ、城中可<sub>レ</sub>被<sub>ニ</sub>相救<sub>ニ</sub>術も難<sub>レ</sub>計候。一先信長へ降參可<sub>レ</sub>仕、左有時僞て兩人の男子於<sub>ニ</sub>我在所<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>令<sub>ニ</sub>籠居<sub>ニ</sub>。其時秀吉拵置き候要害を離るれば、有<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>之可<sub>レ</sub>遂<sub>ニ</sub>合戦<sub>ニ</sub>。兩人も時節を見合、秀吉の旗本を被<sub>レ</sub>切崩<sub>レ</sub>ば可<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>勝利<sub>ニ</sub>。後戰勝利の術なれば、信長へ降參を申せと御内意被<sub>レ</sub>仰下<sub>ニ</sub>候。宗治・元行・月清御請に、一日も逆身<sub>臣</sub>と世上に呼ばれん事恥辱なれば、信長卿へ降參の事不<sub>ニ</sub>存寄<sub>ニ</sub>所也。無<sub>ニ</sub>是非<sub>ニ</sub>御意の次第也。被<sub>レ</sub>遂<sub>ニ</sub>御防戰<sub>ニ</sub>御武略に相成儀に候はゞ、籠城の諸勢を助け我々は城を枕に可<sub>レ</sub>仕と書留て轉に渡せば、小四郎請取て御本陣へ歸りける。輝元卿は清水中島御返答を將軍へ被<sub>レ</sub>達<sub>ニ</sub>上聞<sub>ニ</sub>候へば、御感悅不<sub>ニ</sub>大方<sub>ニ</sub>候。

## 信長卿軍勢備中へ先達て陣觸の事

柄の將軍義昭公、備中國笠岡湊、村上八郎左衛門在城へ御入城被<sub>レ</sub>成、軍勢は杉山城、走出村折敷山樺、小田村岩屋城・猿掛城・同國淺原福山峰々へ陣取る。清水長左衛門中島大炊助方へ、御奉書被<sub>レ</sub>成下<sub>二</sub>候。柳澤監物・仁木伊賀守へ御請申上る。後詰の先勢岩崎城、天神山の出崎、庇山、楯山の峰々に馳集り軍談評議不<sub>レ</sub>怠。高松城邊は洪水日<sub>二</sub>水重増り、湖水漫々とす。敵方には水責に得<sub>レ</sub>利不<sub>レ</sub>好<sub>二</sub>戰構<sub>レ</sub>陣城<sub>レ</sub>對陣す。織田信長卿も藝州の大勢備中高松城へ後詰の注進被<sub>レ</sub>聞召、高松城へ可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御下向<sub>レ</sub>由にて、五畿内の御勢五萬餘騎被<sub>レ</sub>相觸、先達て池田紀伊守父子・長岡與市郎・明智日向守・高山右近・鹽川吉太夫先立て被<sub>レ</sub>仰付。信長卿も頓て御出陣被<sub>レ</sub>遊の由、上方より申參由敵方へ遣<sub>二</sub>置密使<sub>レ</sub>城内へ有<sub>二</sub>注進<sub>レ</sub>去れども城外一偏の江湖と成て、城兵より敵方へ可<sub>レ</sub>働出<sub>二</sub>術は絶えたり。五月二十五日、清水長左衛門尉より秀吉卿御陣へ以<sub>レ</sub>使札<sub>レ</sub>申し達するは、去る四月二十七日和井元口へ御發向の節、勝負を決せんと存する處に、早く御人數被<sub>レ</sub>入候。重て被<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>御合戰<sub>レ</sub>ば、不<sub>レ</sub>叶迄も遂<sub>二</sub>戰<sub>レ</sub>討死可<sub>レ</sub>仕の處、水責に逢ぬる事案外の次第也。拙者一人切腹可<sub>レ</sub>仕候。城内の諸勢を御助け毛利家へ歸陣被<sub>レ</sub>仰付<sub>二</sub>ば本望也。御返答により日限を定め、切腹可<sub>レ</sub>仕旨申遣し候へば、秀吉卿感聞仕り給ひ、古今無<sub>二</sub>の忠士武士の可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>明鑑<sub>レ</sub>と譽感し、扱被<sub>レ</sub>申越<sub>二</sub>通<sub>レ</sub>諸事可<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>望と有<sub>二</sub>御返答<sub>レ</sub>天下を泰平に任り、主君へ盡<sub>二</sub>忠義<sub>レ</sub>事幸甚たり。

## 秀吉卿陣所へ安國寺御越候様にと輝元卿へ使者參事

同二十七日、輝元卿御本陣へ從<sub>二</sub>秀吉卿<sub>レ</sub>使者を被<sub>レ</sub>立、安國寺を有<sub>二</sub>御越<sub>レ</sub>ば、和談の稠<sub>二</sub>儀<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>度由<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰越<sub>レ</sub>候。三將軍評議の上惠瓊和向を被<sub>レ</sub>遣る。秀吉大悅仕り給ひ、饗應様々の上にて秀吉卿安國寺へ被<sub>レ</sub>仰は、信長卿より秀吉を中國へ指向給ふ遺恨は、義昭公を中國へ呼迎へ、義昭公の威を借り輝元日本國殿と成り給ふ望有<sub>二</sub>之故也。自今伯州<sub>二</sub>矢走川<sub>レ</sub>を境に、備中國は高橋川限に、中國一圓毛利家可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御支配<sub>レ</sub>扱又信長卿と和談の驗には、清水長左衛門城

\*矢走川は八橋川なり。

中の軍勢の命に替り切腹の有望被<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>。長左衛門に切腹被<sub>レ</sub>仰付<sub>二</sub>ば秀吉是を一働に任り上洛可<sub>レ</sub>申と語り給ふ。安國寺委細承り輝元卿へ右の趣を申上れば、輝元卿御返答に、國分の事は不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>兎角<sub>一</sub>、當家へ忠義を守る長左衛門に切腹せさせん事不<sub>レ</sub>思議一處也と、及<sub>二</sub>兩度<sub>一</sub>て無<sub>レ</sub>御合點<sub>一</sub>故、蜂須賀彦右衛門淺野彌兵衛、安國寺へ内證申すは、御兄弟同事の上原右衛門大夫殿も頗に信長御方に被<sub>レ</sub>參候。其外中國の國主郡司信長へ懇望有<sub>レ</sub>之證據是也と、秀吉卿へ諸方より來る誓紙取出し安國寺に見せ、此度は利を曲て秀吉と和談可<sub>レ</sub>宜と、隆景へ能<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>申達<sub>一</sub>候へと兩人種々申し、安國寺へ金銀重寶を給はる。惠瓊和尚申すは、右の趣幾度申聞すとも隆景承引仕る間敷候。愚僧高松へ參り清水中島に右の趣可<sub>レ</sub>申聞<sub>一</sub>と語る。秀吉卿御陣前より船に乗り、安國寺は高松城内へ來り、清水宗治に對面仕り、右の趣を語る。宗治一類涙を流し、君有<sub>レ</sub>仁則臣義を以て報ずるは、臣下の度也。我百年の齡を經るにも非ず。今天下泰平の洪基は唯此一事に有り。宗治急ぎ腹切て和談を調和可<sub>レ</sub>仕と云ふ。中島大炊助清水月清入道是を聞て、義に當て報<sub>レ</sub>恩致<sub>レ</sub>死事は臣の道也。御當家の安否を被<sub>二</sub>捨置<sub>一</sub>不肖の我々を救ひ給ふ事生々世々恭し。かゝる時節に一命を捨てんこそ佳名を末代に残す。是武士の本意願ふ所也。存命して何かせん。縦太守の背<sub>二</sub>意趣<sub>一</sub>とも、急ぎ切腹を可<sub>レ</sub>仕由安國寺に語れば、船に乗り羽柴陣へ往き、清水中島所存有<sub>レ</sub>之儘申上れば、殊勝の勇士也と譽感仕り給ふ。

### 高松城主より秀吉卿へ可致切腹と案内の事

同年六月朔日、從<sub>二</sub>清水長左衛門中島大炊助爲<sub>一</sub>兩使、家臣荒木三河・近藤新九郎を秀吉卿御陣所へ差遣し、清水宗治中島元行首御望の段、輝元方へ被<sub>二</sub>御遣<sub>一</sub>候故、御和平破れ候と承る。我々が志を以て天下大亂を治むる事幸甚たり。小船一艘被<sub>二</sub>下<sub>一</sub>ば、來る四日に切腹可<sub>レ</sub>仕。自今輝元隆景へ被<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>御入魂<sub>一</sub>高松籠城の貴賤、毛利家陣所へ被<sub>二</sub>助返<sub>一</sub>ば、死後の大望不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>之と申上<sub>一</sub>る。秀吉卿宣ふは、無<sub>二</sub>の忠士也、無<sub>二</sub>比類<sub>一</sub>と感悅不<sub>レ</sub>淺。何事も可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>任<sub>一</sub>望と有御返答<sub>二</sub>れば、以<sub>二</sub>一心<sub>一</sub>悻名を後代に残し、諸勢を下城さずる事本望也。銘々持口を掃除仕り、禰屋孫市郎中島孫兵衛に銘々居所に注文を張り付、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>相渡<sub>一</sub>と觸廻す。

## 從秀吉卿高松城内へ御音信被遣事

淺野彌兵衛堀尾茂助より、秀吉卿任仰、六月二日爲音信、永々籠城辛苦察入候。暫時の慰に上林の極上名酒珍肴饋進候。宗治元行御禮申上、切腹は彌四日に相定むと及御返答、宗治元行城中の諸物頭へ觸廻す。從秀吉卿爲音信上林極上酒肴を給る。今生の名殘の一會任り籠城の苦勞を晴さん、本丸へ來給へと觸ければ、吉田、沼田、三原より籠城衆、旗本の物頭本丸に來る時に、宗治兒姓に鬚を抜せて居たり。各申は不相應の儀也と申せば、宗治笑ひ、某が首は頓て信長卿の可懸御目鬚を其儘置ならば、籠城忘却故誠本ノマれん事の口惜く存に付、男を作り申也。各申は御切腹明日に相究ると承る。此間如申上、今度御供不申在所々々へ歸なば、諸人の可有嘲。一同に切腹仕死出三途の川御供申さんと望めば、宗治申は、尤也。乍去一騎當千の時節なれば、各は在所へ歸給へ。於當城某一人切腹申候へば相濟也。未及左衛門殿は從藝州御加勢大將なれば同心可申。中島大炊助へ宗治申は、御邊は某と同意の覺悟に相見え候事非本意候。於當城某に相押へ候様に、御邊は幸山城を相守候様に兼ての御仕置也。今度上方の大軍押下る聞え有之ば、無覺束思召當城へ御加勢に被下、二三の丸番丘丸へ被相籠、諸物頭へ指引異見被申、拙者も致軍談候様に被仰渡候へば、當所にては拙者切腹申候得ば相濟也。弓取の習に命を一時に捨つる事は安し。義を萬代に留る事は難し。存命して義を立る事末代の面目也。不測轉變の出來る浮世なれば、暫く待給へ。御大將御和平なれば、城内の掃除を申付城相渡され、籠城の物頭諸軍勢の甲乙被盡粉骨品々言上仕、一類の妻子無事に下城仕らせ、於猿掛城三殿の任仰懸命の地を給らば、一族從類を扶持仕置、悻源三郎を取立後戰の御用に立給へと、大炊助切腹の段を申留、妻子の行末を中島大炊助清水右衛門尉に頼置、爲暇乞二献を初め、銘々へ盃を取替す。

## 清水宗治嫡子源三郎へ書置并白井忠死の事

宗治元行銘々へ申渡すは、城中掃除仕り、武具を銘々持口に飾り、注文張付置き、禰屋孫市郎中島孫兵衛に可相渡。宗治嫡子清水源三郎・孫中島吉十郎、三原城へ遣置き當城に有合されば、末期の三首を殘置、成人の後此心を悟り、可抽忠勤と書記す。其歌に曰、

恩をしり慈悲正直にねかひなく辛勞氣つくし天にまかせよ

朝起や上意算用武具普請人をつかひて事をつゝしめ

談合や公事と書狀と威儀法度酒と女に心みたすな

六月三日

清水源三郎殿參

清水長左衛門尉宗治

清水宗治が郎等に白井與三左衛門と云強者あり。今度籠城に池下丸持口なれば勤番無懈怠、去る四月二十七日の合戦に、左の股を打せけれども堅固に居り、晝夜武略の志深き者也。六月三日大手矢倉より本丸へ使者を立、直に申上度様子有之と申に付、宗治下れば白井大きに悦び、今度君命に替程成忠戦不仕、殘念也。御切腹明日に相究ると承る。定て從秀吉卿可有檢使某は先達て御供を仕、死出三途の川瀬を仕らんと、腹巻を引上切腹す。宗治見て、汝が忠勤常々他に異也。妻子に付置んと思ひしに、案外殘念也と落涙仕、大森助兵衛に介錯申付、清水山法印葬禮仕り、椗鼻に埋め一堆の印塔に成る。人皆忠臣とをしみける。

### 清水宗治切腹并檢使堀尾茂助音信の事

六月四日、清水宗治は佛前にて念佛を唱へ、其後一類に最後の暇乞仕、巳の刻になれば、高松城大門虎口より船に乗浮べば、清水月清入道・小早川援兵末及左衛門、宗治か郎等難波田兵衛・清水田右衛門・國府市正一つ流に棹刺せば、中島大炊助清水右衛門尉も船に乗んとせしが、宗治堅く留て中島大炊助へ、御邊は一族と云ひ二階堂近江守氏行、我家を取立給へば、一家の物領と仰ぎ、今又御邊幼稚の子供を取立、後戦一方の御用に立給はば、草の陰苔の下

迄も如何程か可<sub>レ</sub>嬉と申、弘誓の船に棹刺て、生死の海を漕別る。一乗の法の船、煩惱の筏をば、生死無常の風吹分くれば、西は身方の御大將輝元公隆景卿、東は敵の大將御次丸羽柴秀吉卿、宗治が乗たる船蛙が鼻へ漕着る。其時從<sub>二</sub>秀吉卿<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>檢使<sub>一</sub>堀尾茂助小船に乘來り、宗治に對面仕る。筑前守申は、此間申談通、是迄の御出殊勝譽感不<sub>レ</sub>淺候。永々籠城の御苦勞致<sub>二</sub>推察<sub>一</sub>候。楮堀尾茂助心有侍にて、美酒嘉肴持參仕る。宗治甚悦び一禮仕、筑前守殿に宜しく御禮、茂介殿へ頼申とて盃を廻し、宇治一曲を唄出せば、兄月清入道。末及左衛門。難波田兵衛。清水田右衛門。國府市正緩々と唄ひ、秀吉卿御陣前へ船を漕着る。天正十丙午歲六月四日、

世の間の惜る、時散てこそ花も花なれ色も有けれ

宗治

浮世をば今こそ渡れ武士の名を高松の苔に残して

月清

朗詠して宗治切腹す。國府市正介錯、首を桶に納候。月清入道も切腹す。介錯荒木三河、首は桶に納む。何れも有<sub>二</sub>武功<sub>一</sub>普代の侍、思ひく<sub>二</sub>に致<sub>二</sub>切腹<sub>一</sub>候を、小人頭大森助兵衛、池上與右門致<sub>二</sub>介錯<sub>一</sub>、假名實名相答、首を堀尾茂介に相渡す。右六人の死骸を荒木三河取歸る。抑武士の道、忠義の二字に留て名を後天に揚るを本意とす。清水一族骸は堤防の水に沈めども、名は高松に留る名譽の勇士、五十六歳にして遂<sub>二</sub>義死<sub>一</sub>未だ半白の歳を失ひ、泉下の客と成るを惜まぬ人はなし。備中國清水氏中島家は、雲州尼子家幕下の時、諸侯列坐上下の遺恨あり。毛利元就卿と一身の堅約仕、大内義隆卿の隨<sub>二</sub>幕下<sub>一</sub>候。中國の諸侯、或時は尼子に隨ひ、又大内に隨ひ、或時は細川三好に隨ふ。此節は信長卿に隨ひ、仁義の薄き侍は死を爲<sub>二</sub>免<sub>一</sub>、幾度も變じ道違ふ事多し。清水中島、不<sub>レ</sub>叶迄も勇士の道を兼て、忠功を心懸、死を善道に守處に如<sub>レ</sub>此成行き、御當家御弓矢の勢可<sub>レ</sub>劣弱と、身方の諸將愁けり。毛利三殿へ、安國寺委細申上れば、此度の爲體不<sub>二</sub>申聞<sub>一</sub>段案外成儀と、御機嫌を損じ候得共不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>是非<sub>一</sub>、清水無<sub>二</sub>の忠義不<sub>レ</sub>淺由<sub>一</sub>、御落涙被<sub>二</sub>爲<sub>二</sub>成御惜候事限なし<sub>一</sub>。御和平の御神文、安國寺双方へ取替し、明る六月五日に、輝元卿より秀吉卿へ御加勢の物頭軍勢を被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>、秀吉卿御上洛、藝州の御大將、岩崎天神山、釋迦峰、不動が嶽の御備、横谷村猿掛城へ御歸陣の節、從<sub>二</sub>上方<sub>一</sub>飛脚到來。明智日向守發<sub>二</sub>逆意<sub>一</sub>、六月二日京都於<sub>二</sub>本能寺<sub>一</sub>、信長卿御切腹、二條御館にて城之助殿も御生害の由、米原平

内左衛門より御注進申上候。秀吉卿へは六月三日の暮、京都より飛脚到來を即時に御手討に被<sub>レ</sub>成、毛利家と御和睦を急ぎ御調へ御上洛被<sub>レ</sub>成候。神明の加護か、不思議の大將と申けり。宗治が首於<sub>三</sub>羽柴山被<sub>レ</sub>遂<sub>三</sub>實檢、名譽の勇士也。武士たらん者は斯有度也。從<sub>三</sub>信長卿<sub>一</sub>數箇所被<sub>レ</sub>下、御方申様にと被<sub>三</sub>仰遣<sub>一</sub>候得ども、不<sub>レ</sub>隨<sub>三</sub>其意<sub>一</sub>命を限りに一方を押へ、天下の和平を調へ、諸人を助くる事廣大の忠義也。古今武士の可<sub>レ</sub>爲<sub>三</sub>明鑑<sub>一</sub>者也と、不<sub>二</sub>大形<sub>一</sub>褒美仕給ひ、持寶院山内に築<sub>二</sub>一<sub>一</sub>堆<sub>二</sub>石塔<sub>一</sub>を被<sub>レ</sub>建置、近士武將に回向被<sub>三</sub>仰付<sub>一</sub>、以來忠義の譽爲<sub>三</sub>不朽<sub>一</sub>也。御情の程を感じ、一族たる者致<sub>三</sub>落涙<sub>一</sub>候。

### 中島元行清水宗重猿掛城へ被<sub>レ</sub>召寄事

清水長左衛門切腹の後、城内貴賤從<sub>三</sub>藝州<sub>一</sub>加勢の侍歸陣。清水中島兩家の郎等、戦死の殘人纔に二百騎計、妻子引連れ在所々々へ引退候。從<sub>三</sub>輝元卿隆景卿<sub>一</sub>、中島大炊助に高松籠城の一族加番の侍大將召連れ、猿掛山城へ可<sub>レ</sub>致<sub>三</sub>登城<sub>一</sub>と仰付、中島一族清水右衛門尉加番の銘々召連、致<sub>三</sub>登城<sub>一</sub>候。中島大炊助を被<sub>レ</sub>召、今度高松籠城の爲體、委細に申上候様に仰に付、委細言上す。各無<sub>二</sub>の忠義不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>勝計<sub>一</sub>。輝元公大炊助に仰に、敵將和井元口へ取詰候節、御方以<sub>三</sub>武略得<sub>一</sub>勝利<sub>二</sub>敵數多討捕段<sub>一</sub>、清水長左衛門其外目代共より遂<sub>三</sub>注進<sub>一</sub>候。古今の武勇無<sub>二</sub>比類<sub>一</sub>候。殊に安國寺長左衛門へ申達通、御方存命候て、當國境目の始末被<sub>三</sub>相調<sub>一</sub>候事忠義不<sub>レ</sub>淺由にて、兼光御腰物致<sub>三</sub>拜領<sub>一</sub>候。隆景卿被<sub>三</sub>申聞<sub>一</sub>は、大炊助高松籠城の内、數度の武略忠戰無<sub>二</sub>比類<sub>一</sub>候。先年三村逆意の節、御方以<sub>三</sub>武略<sub>一</sub>備中備前御存分に御退治、其故當家御弓矢の色直り、次第に御利運の儀に候。數度の忠義不<sub>レ</sub>淺由にて、三原正家の御腰物被<sub>レ</sub>下候。御感狀居城等は重て可<sub>レ</sub>被<sub>三</sub>仰出<sub>一</sub>候。其外籠城の類加番の侍大將銘々被<sub>レ</sub>召出、永々籠城の苦勞、於<sub>三</sub>諸手<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>抽<sub>三</sub>忠戰<sub>一</sub>の段、御感悅被<sub>レ</sub>成と、御腰物金銀を被<sub>レ</sub>遣、向後彌可<sub>レ</sub>抽<sub>三</sub>忠義<sub>一</sub>の由被<sub>三</sub>仰渡<sub>一</sub>候。境目の御仕置、中島大炊助・清水右衛門尉に被<sub>三</sub>仰付<sub>一</sub>候。

## 中國兵亂記五終